

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2775 号 2015.12.17 発行

認知症 当事者の発信相次ぐ

産経新聞 2015年12月17日

困りごととその対策

	困りごと	対策
佐藤さんの困りごとと、その対策リスト(抜粋)	待ち合わせ時間を間違える	▶ 日時を時間管理アプリに入力する
	時間感覚がなく、約束の時間に遅れそうになる	▶ 出発時にアラームを鳴らす
	曜日が分からず、休みの日に図書館に行ってしまう	▶ 散歩だと割り切る
	何月何日何曜日が分からなくなる	▶ 日付や曜日が表示されている時計を買う
	複数の予定を入れると2件目以降を忘れる	▶ 1日1件しか予定を入れない
	スーパーの商品の位置が覚えられない	▶ 効率的に買い物をする考えを捨て、のんびり買う
	買い忘れや、商品をダブって買ってしまう	▶ 買い物リスト、買わないリストを持って買い物に行く
	血糖値を測るのを忘れる	▶ 携帯電話のスケジュール機能でアラームを設定して注意喚起する
	はがきを出すのを忘れる	▶ 書いたらすぐに出しに行く
	タイマーをかけ忘れ、風呂の湯をあふれさせた	▶ お湯が入ったら自動的に止まる装置に換える
	することがなく、生活にはりがない	▶ 無理に予定を作る
	同時に2つのことができない	▶ 同時に2つのことはしない。1つを終えて次をする
	会った人の名前が覚えられない	▶ 覚えていたい場合はタブレット型端末で写真を撮り、名前を入力する
	折り返しの電話でも、要件を忘れてる	▶ 重要なことはメールでやりとりする

▶ 昨日、どう過ごしたのか思い出せない

■ 「役割や生きがい持てる手助けを」

知症の本人の話や、周囲の機運が高まっている。当事者である樋口直美さんと佐藤雅彦さんは、認知症と診断されたそれぞれの体験を記した著書を出版。いずれも11月、日本医学ジャーナリスト協会の優秀賞を受賞した。どちらの著書も、周囲が偏見を持たず、本人が役割や生きがいを持って生きることが大切だと訴えている。(佐藤好美)

認知症は、脳の血管障害が原因となる「脳血管性」、脳に特殊なタンパク質がたまる「アルツハイマー型」、アルツハイマー病とパーキンソン病の特徴を併せ持つ「レビー小体型」などに分けられる。

「私の脳で起こったこと」(ブクマン社・1512円)は、「レビー小体型認知症」と診断された樋口直美さん(53)の2年半の記録だ。レビー小体型は記憶に関する障害は比較的軽いが、幻視や注意力低下、鬱などの症状があり、薬に過敏に反



応する。認知症の2割を占めるといわれるが、あまり知られておらず、鬱病やパーキンソン病と診断されることも少なくない。

樋口さんも最初は鬱病と診断され、抗鬱剤の服用で状態が悪化した。その後、専門医に正しく診断されたが、当時は自身も一般的な認知症のイメージにとらわれていた。いずれ知性も人格も失い、理解できない言動で家族に迷惑をかけると思って絶望し、幻視を見ては病気の進行におびえた。

だが、今ではそのストレスこそが状態を悪化させていたのだと感じている。抗認知症薬の使用で安定し、人と楽しく笑ったり、適度に身体を動かしたりすることで、よい状態を保っているからだ。疲れから失神しそうになったり、天候の変化などで血圧や体温などが一定に保てないなどの症状はあるが、落ち着いた日々を送る。樋口さんは「誤った投薬で悪化している人が多い。適切な治療とケアで穏やかに暮らせるのに、家族や周囲が言動を否定したり、叱ったりでストレスをかけ、症状を悪くしているケースもとても多い」と指摘する。

著書にはこう記す。「誰もが、正しく病気や障害を理解し、話すことができ、それを自然に受け入れられる社会なら、病気や障害は、障害でなくなります。私は認知症を巡（めぐ）る今の問題の多くは、病気そのものが原因ではなく、人災のように感じています」

「認知症になった私が伝えたいこと」（大月書店・1728円）の筆者、佐藤雅彦さんは51歳のとき、アルツハイマー型認知症と診断された。

医師から施設入所を勧められたが、「人生を楽しみたい」と1人暮らしを続ける。生活に不自由は多いが、日程や時間の管理にはパソコンやタブレット型端末、携帯電話のアラームやスケジュールを駆使する。「複数のことを同時にしない」「効率的に何かをしようとしなない」などの割り切りや発想転換は、読む者を勇気づける。

佐藤さんはこう記す。「認知症であっても、いろいろな能力が残されているのです。社会にある認知症に対する偏った情報、誤った見方は、認知症と診断された人自身にも、それを信じさせてしまいます。この二重の偏見は、認知症と生きようとする当事者の力を奪い、生きる希望を覆い隠すものです」

2人は共通して「役に立ちたい」との思いを抱いている。樋口さんは「障害はあっても、普通の人として敬意を持って接してほしい。気持ちをじっくり聞き、役割や生きがいを持ち続けられるように手助けしてほしい」と言う。佐藤さんも「人のために何かすることは、生きる喜びの一つ」とボランティアを続ける。そんな思いを、くめるかどうかが問われている。

■改善に環境影響大

樋口直美さんと面識がある千葉大医学部附属病院の上野秀樹特任准教授の話「疾病のない人でも、温かい雰囲気の中では能力以上の成果を挙げることができるが、冷たい雰囲気の中では成果を挙げられないことがある。認知症の原因疾患のある人は、脳の脆弱性（ぜいじゃくせい）があるため、より環境の影響を受けやすい。樋口さんは以前は意識障害や譫妄（せんもう）などがあったようだが、今は適切な治療、治療への信頼感、良い環境があり、状態が改善したのだろう。原因疾患が引き起こす脳の神経細胞の機能低下は改善しないが、ストレスなどに脆弱なために起きる認知機能低下などの状態は改善可能性がある。両者を分けて考えることが必要だ」

■素朴な願い、かなえる一歩に

「私の声が見えますか？」（harunosora・1836円）には、45人の認知症の人の言葉と家族や介護職のコメントが並ぶ。監修した認知症介護研究・研修東京センターの永田久美子研究部長は「認知症の人は何も分からないと誤解されているが、話したいと思っている人は多い。決めつけずに聞いてみるのが大切です」と言う。同書では、本人の一言から悲しみや苦しさを感じ取ることができる。

永田部長によると、話を聞くにはコツも必要。途中で口をはさまず、ゆっくりと言葉を待つ。楽しい雰囲気が作れると、楽に話せる。ためこんだ思いを出すことで本人もすつき

りし、気持ちが整理され、自分を取り戻すことができる。

永田部長が過去に自治体などで行ってきた取り組みでも、話を聞くことは安定した生活の鍵になる。例えば認知症の人が行方不明になる事例が多いが、本人のつぶやきを聞くと、「ゴミを出したい」「買い物に行きたい」などの素朴な願いがある。「それを聞き流さず、かなえる方法を考えることが大切」（永田部長）。家族がゴミ出しに誘ったり、地域で「買い物につきあうチーム」を組んだりして、行方不明の発生を防ぐところも増えてきた。

「競馬に行きたい」「写真撮影に行きたい」と聞いて、同じ趣味を持つ人が誘ってくれるようになった例もある。永田部長は「家族が同行すると、どうしても『もう帰ろう』になりがちだが、趣味が同じ人同士は支援者としてではなく、仲間として楽しく過ごせる」という。

逆に、本人の話をおかず、徘徊（はいかい）防止のために医療や介護のサービスを入れると、本人の人間関係や地域での生活も途切れてしまう。「話を聞くと、日常の延長線上で支え手が現れる。最近は支えてくれるグループも地域に増えてきた。家族だけでがんばらず、助けを借りることもつながる」と話している。

「うるさい、クソババア」突然の反抗に慌てない 日本経済新聞 2015年12月17日

小学校に上がると親子関係はあつという間に次のステージへ。10代前半から始まる“思春期”も子育ての大きなテーマ。「いつかは来る、わが子の思春期」を上手に乗り切るために、知っておきたい親子のコミュニケーションのポイントを探ります。思春期を迎える子どもたちと長く接してきた2人の専門家に話を聞きました。



ママ、ママ…とあんなに甘えん坊だったわが子が、ある日突然、まさかの捨てセリフ、「クソババア」を吐き捨てる――。

いつか来るかもしれないこの瞬間に味わうであろう喪失感を想像するだけで切なくなるという親は多いだろう。

■単純に褒めるだけではうまくいなくなる

思春期というと小学校高学年くらいからというイメージがあるが、早い子では小学校中学年からその兆候が見えてくる。あるいは小学校に入るか入らないかという早期から、「単純に褒めるだけで素直に言うことを聞いていたのに、反抗されることが増えてきた」と戸惑っている人もいるかもしれない。

思春期、プレ思春期の「わが子の変化」に対応するために、親として準備しておきたい態度とはどのようなものなのか。

公立中学校で19年間「保健室の先生（養護教諭）」として経験を重ね、現在、一般社団法人生涯学習開発財団の認定コーチとして思春期の子どもに対する向き合い方の指導を行っている三浦真弓さんが日ごろからアドバイスしているのは「親側の意識の切り替え」だ。

■10歳から芽生えてくる「親を疑う」意識

「小学校3～4年生ごろになると、親の言うことを100%受け入れるのではなく、『そんなこと言っているけど、本音は違うでしょ？』『世の中ってお母さんやお父さんが言っているのとは少し違うみたい』と“親を疑う”意識が芽生えます。ターニングポイントの目安となるのは10歳。

7つ、8つ、9つと「つ」で数えられる年齢を脱してティーンエイジャーとなったころから、親自身が子どもの変化を受け入れる体制を整えていきましょう」

親側が子どもの変化を理解する受け皿を用意していなければ、動揺が子どもにも伝わって、無用の距離が生まれてしまうという。

■学校のことを話してくれないときは…

思春期の初期によくある子どもの行動としては、例えば「学校のことをあまり話してくれなくなる」といったことがある。

そんなときにはむやみに聞き出そうとせずに「見守る」態度を貫く。「口は出さなくても、“関心”は示し続けて。態度は素っ気なかったとしても、子どもは親が自分に関心を持ってくれることを望んでいます。“見守る”という『何もしなくていいんですか?』と質問されることがありますが、“見放す”と“見守る”は違います。『最近、〇〇ちゃんは元気?』など子どもの友人関係に対する興味などさりげなく伝えるといいと思います」

門限を過ぎて遊ぶ日が続いた時には、子どもの行動を問い詰めて終わるのではなく、「心配した」という気持ちをしっかり伝えよう。「～～べき」という説教・説得よりも、「(親として)私はこう感じた」という気持ちや感情のほうが、子どもは受け入れやすくなる。

■部屋が散らかるのは一つのサイン

「きちょうめんな性格だったはずなのに、部屋がぐちゃぐちゃに散らかるようになった」といった生活習慣の変化が表れることも。ただ、これはごく当たり前のこととして「長い目で捉えるほうがいい」と三浦さん。

「思春期は、『どんな大人になろうか』と迷う時期。その迷いはそのまま生活の至る所に表れます。部屋が散らかる子、髪形を突然変える子、音楽の趣味が変わる子など、“迷い”の表れ方は十人十色。親としては『この子はただ迷っているだけ』と冷静に受け止め、嵐が過ぎ去るのを待つのが賢明です」

学校生活に支障が出そうなくらい行き過ぎていけば、期限を設けるのも一つの方法。「今年の間は何も言わないけど、年が明けたらそろそろ学年が上がるんだから少し考えてね」



など伝えてみるのがおすすめだという。

■子どもが離れて寂しい親心の切り替え

思春期を迎えると「子どもが急に離れていくように寂しく感じる」という親も少なくない。親としても子離れが必要な時期だが、なかなか気持ちの切り替えが追い付かないのである。

この寂しさを乗り切るための考え方として、三浦さんは「夫婦回帰」を提案する。

「子どもが小さいときは夫婦の会話も子ども中心で、お互いの日常や将来についてじっくり話す時間はほとんど

と取れませんよね。子どもに注いでいた関心を少しずつパートナーに戻していく。まずは夫婦の会話にかける時間を出産前のレベルまで戻すよう努めてみてください。両親がよく会話している、という情景は思春期の子ども達にとっても“安心して帰れる家庭”のベースになります」

■子どもの心の支えになる「第3の大人」

「子どもが親から離れ始める思春期ならではの役割」として、特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクール代表理事の平岩国泰さんが提案するのは「第3の大人」がもたらす効果だ。放課後の小学校を活用して子どもたちが多様な体験を重ねる「アフタースクール」を実践している平岩さんは、プレ思春期・思春期の子ども達の心の支えになるのが、親・学校の先生に次ぐ「第3の大人」であることを実感してきたという。

「例えば、サッカークラブのコーチや尊敬できる塾講師といった“師”のような位置付けとなる大人の言葉は、思春期の子ども達には非常に響くようです。『親の言うことを聞くのは何となく嫌。でも大人にはなりたい』という微妙な気持ちに伝えてくれる、社会人としての先輩と出会えるチャンス子どもにできるだけたくさん与えるといいのではないのでしょうか。私たちはアフタースクールで『市民先生』と呼んでたくさん招いています」

アフタースクールの活動を始めて間もないころ、平岩さんが体験した実例としてこんな話がある。

■「頼りにしている」——尊敬できる大人からの一言が子どもを変える

小学4年生のユウキ君（仮名）はおとなしい性格で、学校での勉強やスポーツが苦手。性格も幼く、クラスの中で気後れして、両親も心配していた。あるとき、アフタースクールの活動として料理の職人を招いて和食を学ぶプログラムにユウキ君は参加した。参加児童の中で一人だけ高学年だったユウキ君は市民先生に呼ばれ、皆の前でこう言われた。

「君が私の一番弟子だ」

以来、料理の進行の補助役としてユウキ君は市民先生の手伝いをするようになり、何回かプログラムを重ねるうちに市民先生からこう声を掛けられた。「君がいてくれないと困る。今日も頼むよ」。

尊敬する人に必要とされた経験はユウキ君を変えた。プログラムを終えた3カ月後には、ユウキ君の表情は見違えるように明るくなり、学校生活でも自信を取り戻していったという。

「この子は今、応援が必要なのだと、きっと市民先生は見抜いていたのだと思いますが、尊敬すべき大人から『頼りにしている』『君がいないと困る』という言葉をもたらしたことはユウキ君の自己肯定感を大きく育てたのだと思います。思春期の子どもには、このように大人の仲間入りをして、「あなたがいて助かった」という声をかけてもらうことが非常に効果的だと感じます。たとえ直接の言葉がなくても、様々なフィールドで活躍する大人との出会いは、将来に対する希望や『こんな素敵なお大人になってみたい』というイメージを膨らませると思います」



三浦真弓 コーチング・マーム代表。公立中学校養護教諭（保健室の先生）として19年間勤務。保健室に来る生徒など3000人以上の心の声を引き出してきた。2010年より、成長する親子を応援するコーチングセミナーを開催するコーチング・マームを主宰。PTAや保護者会等でのセミナー講演や電話、スカイプ、メールを使った個別コーチングで思春期の子どもを持つ親の相談に乗る。養護教諭、中学校・高等学校教諭1種（保健）、NPO法人あいちかすがいっこ理事、一般財団法人魔法の質問キッズインストラクター、生涯学習開発財団認定コーチなど。2女1男の母。



平岩国泰 特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクール代表理事。文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会専門委員を歴任。自身に子どもが生まれたことをきっかけに「放課後」の過ごし方に危機感を感じ、「アフタースクール」の活動を開始。長女の小学校入学のタイミングで会社を退職し、NPO法人に専念。2005年の活動開始以降、「アフタースクール」では、400種類以上のプログラム、2000人以上の市民先生が生まれ、5万人以上の子どもが参加。グッドデザイン賞・キッズデザイン賞をそれぞれ3回ずつ受賞。（ライター 宮本恵理子）

パチンコ店で生活保護受給者調査、支給停止も 別府市 朝日新聞 2015年12月16日

大分県別府市が、パチンコ店などに生活保護受給者がいないか調べて回っていたことがわかった。10月に調べた際は、発見した受給者25人のうち数人が調査中に複数回パチンコ店にいたとして、支給額の大半を1カ月間、停止していた。厚生労働省は「調査は適切ではない」としている。

市が15日の市議会で明らかにした。調査の根拠について、市は支出の節約に努めることなどを求めた生活保護法と説明。担当者は「他の納税者から苦情は多く、法の趣旨に反する人がいれば厳しく指導せざるを得ない」とする。受給開始に際し、遊技場に行くのは慎むとする誓約書を取っていることも理由に挙げた。

市によると、10月の計5日間に、市職員35人が同市内の13のパチンコ店と市営別府競輪場を巡回。受給者25人を見つけて市役所に一人ずつ呼び出し、行かないように注意。調査した5日間で再び見つけた受給者については、支給額の大半を1カ月分取りやめ

た。

施策充実へ力合わせ 共産党議員団 患者・障害者団体と懇談



しんぶん赤旗 2015年12月17日
22団体47人と懇談した日本共産党国会議員団の
「障害者の全面参加と平等推進委員会」=16日、
衆院第2議員会館

日本共産党国会議員団でつくる「障害者の全面参加と平等推進委員会」(小池晃会長・副委員長、参院議員)は16日、国会内で、22の患者・障害者団体47人と懇談。17団体・20人が発言しました。

政府は来年の通常国会に、障害者総合支援法改定法案を提出する予定。同年2月には障

害者権利条約批准による政府報告書を提出しなければなりません。同年4月からは障害者差別解消法が施行されます。

小池氏はあいさつで、「安倍政権になってからの3年間は社会保障削減で患者・障害者にとって受難だった。来年は重要な1年になる」と指摘。同政権の社会保障施策をめぐる動きにふれ、「障害者権利条約をないがしろにするような施策の逆戻りは許されない。力を合わせて障害者・難病施策をすすめていこう」と述べました。

多くの障害者団体は、厚生労働省の審議会が総合支援法改定に向けて取りまとめた報告書について、政府が2010年1月からすすめた障害者制度改革の方向性と逆行している懸念を訴えました。

「きょうされん」は、利用者負担増と、障害福祉制度と介護保険制度の統合に道筋をつけたことに警鐘を鳴らしました。障全協は、障害者が65歳になると介護保険に移行させられ利用者負担増になると話しました。「障害者の生活保障を要求する連絡会議」は、障害者手帳のない軽度難聴者や知的障害者、現在対象外の慢性疾患患者らも支援の認定は受けられるようにと求めました。

患者団体からは、今年1月から施行の難病法について「同法施行で新たに対象疾病となったが、重症な患者でなければ対象にならずハードルが高すぎる」(胆道閉鎖症の子どもを守る会)、「新たな患者負担の仕組みで高額な治療費が負担できず重症化が懸念される」(多発性硬化症友の会)など問題点があげられました。

日本障害者協議会は、国連・障害者権利委員会に提出する政府リポートが、製作過程で障害者の参加が不十分な上、政府が行った法整備にはふれるものの、それによる共生社会実現のすすみ具合については述べていないと批判しました。

同委員会会長代理の高橋千鶴子衆院議員が閉会あいさつしました。

5年で乳幼児59人死亡 見過ごせない保育施設での「突然死」 乳幼児の預かり初期に注意



産経新聞 2015年12月16日
保育関係者を対象にした突然死予防の講習会。預かり初期のストレスなどについて考えた =大阪市天王寺区

元気だった赤ちゃんが睡眠中に突然死亡する「乳幼児突然死症候群(SIDS)」。「うつぶせ寝」など危険因子に関する情報の周知が進み、発症は年々減少傾向にある。しかし、最近の研究で、保育施設での突然死は増加傾向にあり、特に預かりはじめて1カ月以内の時期に多いことが分かってきた。親がしばらく付きそう「慣らし保育」の充実など預かり初期の保育の

あり方を模索する動きも出始めている。(服部素子)

◆5年で59人死亡

東京都保健医療公社多摩北部医療センター(東京都東村山市)の小保内俊雅小児科部長らの研究グループは、保育施設での突然死について調べるため、平成20年から24年までの5年間の「保育所及び認可外保育施設事故報告書」を詳細に分析、昨年11月に学会誌に発表した。同報告書は、厚生労働省が保育施設に対して、死亡事故など重篤な事故が起きた際に提出を求めている。

その結果、5年間に保育施設で死亡した乳幼児は59人。そのうち50人が睡眠中に死亡していた。月齢別では6カ月以下が18人、7カ月以上1歳未満が15人、1歳が12人、2歳が5人。発見時の体位は、56%が「うつぶせ寝」だった。

発生時期を調べたところ、最も多かったのは11月で9人。続いて、4月=7人▽3月=6人▽1、2、12月=それぞれ5人、と続いた。1月から4月、10月から12月に集中しており、小保内さんは、「この時期はRSウイルスやインフルエンザなど感染症の流行期と重なっており、集団保育によって感染機会が増えることも危険因子ではないか」と分析している。

◆「慣らし保育」重要

また、4月に関しては、亡くなった7人のケースを詳細に調べたところ、預かってから1カ月以内の発症が6人に上っていた。乳幼児は新しい環境において適応が難しく十分な注意が必要なのが浮き彫りになった。

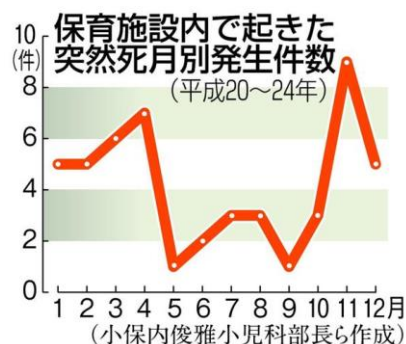
死亡した全乳幼児の在園期間との関係を詳しく検討したところ、登園初日に死亡したのは6人。その後は、2日目=3人▽3日目から7日目まで=4人▽1週間以降1カ月以内=6人▽1カ月以降=14人▽不明=17人—という結果だった。

小保内さんは「小児の予期せぬ突然死は、原因が分かっていないのが現状。保育施設でも家庭でも、危険因子を排除した環境で育児をすることが現段階での最善の予防法だ」と話す。さらに、保育施設に預けられて間もない時期に発症が多いことから、一定期間、親が付き添う「慣らし保育」を実施するなどの対策が必要ではないか、と指摘している。

◆研究成果学ぶ

突然死を防ぐため、こういった最新の研究成果を学び、対策を考えていこうという動きも始まっている。今年6月、SIDS予防に取り組む保育関係者らが「保育中の突然死予防研修推進会」(事務局・広島市)を立ち上げた。メンバーの1人で、応急手当てに関する教材開発や研修を手掛けている「マスターワークス」(静岡県沼津市)代表の伊東和雄さん(57)は、「預かり初期の乳幼児には、生まれて初めて母親と離れて過ごす心理的ストレスや、集団生活での感染症との接触、疲労などの肉体的ストレスが加わっている」と説明。同会では、小保内さんの賛同も得て、啓発プログラム「保育環境における突然死を防ぐために」を作成。各地で講習会などを開いている。

伊東さんは、「1歳未満の乳児だけでなく、3歳未満ぐらいまで注意が必要。忙しい両親との間では連絡帳を活用し、子供の体調不良を把握するなど連絡を密に行うことが予防につながる」と話している。



手や足に障害ある人たちの作品展 東京・池袋 NHK ニュース 2015年12月16日

手や足に障害がある人たちが描いた絵画や書道などの作品を集めた展示会が、16日から東京・池袋で始まりました。

この展示会は、手や足などに障害がある人たちを支援する団体が毎年開いていて、初日の16日は常陸宮さまが出席され、開会のテープカットを行いました。

ことしは全国から絵画や書道、それにデジタル写真など、合わせて1600点余りの応募があり、このうち入賞作品に選ばれた120点余りが展示されています。

厚生労働大臣賞に選ばれた広島市の福島美津子さん(70)の「原爆の子の像」は、広島市の平和公園にある少女の像を描いた絵画で、生後1か月で被爆した福島さんが、原爆投下から70年を迎えたことし、二度と悲劇を繰り返さないよう願いを込めて制作したということです。

また、東京都知事賞に選ばれた特別支援学校に通う、東京・葛飾区の高瀬瑠菜さん(9)の「だいすきなパンダ」は、日頃から上野動物園で見ているパンダを3日かけてキャンパスいっぱいに愛らしく描きました。

この作品展は今年19日まで東京・池袋の東京芸術劇場で開かれています。



不整脈薬、認知症に効果 マウスの神経減少防ぐ 共同通信 2015年12月16日

不整脈の治療薬が、アルツハイマー病で起こる脳の神経細胞の減少を防ぐ効果があるとのマウスの実験結果を、国立長寿医療研究センター(愛知県)や理化学研究所(埼玉県)、同志社大(京都府)などのチームが16日、英科学誌ネイチャーコミュニケーションズ電子版に発表した。

この薬は不整脈や気管支ぜんそくの治療に使われる「イソプロテノール」。チームの高島明彦・同センター分子基盤研究部長は「認知症の進行を止める世界で初めての薬になるかもしれない。人での効果をできるだけ早く明らかにしたい」と話している。

「サル顔」のラン開花 「ほんまにサルや」来年のえと申年を控え話題に 京都の植物園

産経新聞 2015年12月16日

京都府立植物園の観覧温室で開花した、サルの顔のように見えるラン「ドラクラ・ギガス」=16日午後、京都市左京区



花の形がサルの顔のように見えるラン「ドラクラ・ギガス」(別名モンキー・オーキッド)が16日、京都府立植物園(京都市左京区)の観覧温室で開花した。担当者は「来年のえとがちょうど申年ということで、良いタイミングで咲いてくれた」と話している。

南米のエクアドル北部からコロンビアにまたがる高山が原産。顔に見える部分が花で、約2センチと小指の先サイズ。色や形がサルの目鼻に見え、毛のような筋も入っている。日当たりや湿度の管理が必要で、栽培が難しいという。園によると、20日ごろまでが見頃。花を見た来園者も「ほんまにサルや」と驚いていた。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行